
ちきしょう

え c s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちきしょう

【Nコード】

N3672G

【作者名】

えっす

【あらすじ】

漫画に出てきそうな真面目な委員長。メガネ。とある事件をきっかけに総勢200人以上の不良の長となった俺。イケメンで代々ヤクザの家業を営む家の一人息子。武藤君。普通なら関わることのない3人が、奇妙なオッサン（先生）の一言で集まって・・・？

ブログ：いつもの風景

「やる気ないなら帰ってもいいぞぉー！」

ちっ、こんなこと言われて帰る奴がいるかってんだ。

昼休み終了後20分経過。ただ今5時間目、日本史の授業。季節は春。そして俺は窓際。この、時、場所、状況で寝ない奴はいるんだろうか。いるかもしれない、物凄く近くに。

「・・・・・・・・・・はあ」

「なんだい？」

俺はため息を吐きながら、隣の真面目ちゃんから目を離す。

メガネ。そう、クラスに一人はいるメガネ。別にメガネを馬鹿にしていけない。しかし、こうもメガネが似合う奴がいるなんて。

身長は俺より高く、体の線も細い。貧弱ともいう。狐目というか、なんというか、鋭い目つき。漫画に出てきそうな委員長キャラ。なんとリアル（現実世界）でも委員長。

「きめーきめー」

「私語は謹んで、授業受ける」

おまけにこの上から目線。一回ノシてやろつか。いや、やめとこつ。停学明けて2週間も経ってないし。

「あーあ、なんか楽しいことねえかなあー」

「邪魔するなら出て行け！」

ちきしょう。

「霞さん、今日はどうします？」

ああ、これが可愛い女の子からの会話なら俺はキャッチするだろう。だが、実際にこの言葉を放っている奴は、目の下に切り傷痕がある、金髪小僧。俺の一個下だ。

ピアスをしていて、髪は短髪、金髪。見れば一発「不良」。そう俺はその不良達のドン、つまりTOP。

「なあ、大河。俺と武藤の間にある差ってなんだ？」

「武藤？ああ、あのイケメン野郎っすね！あんなの殺すっきゃねえっしょ」

「お前、俺の質問聞いてる？」

「え？なんでしたっけ？」

「・・・もういい・・・」

馬鹿ってどこまで行っても馬鹿。まあ俺も他人のことイエナイ。「目くそ鼻くそを笑う」っていうよね。それ俺のこと。

おっと、イケメンの話をしていると、張本人が来たよ。

「よっ、イケメン」

「黙れよ、不良」

俺の友好的な会話を見事にスルー。もうちよつと言葉のキャッチボールしない？

「てめえ！霞さんに何タレてんだ、ブツ殺すぞ！」

案の定、大河が吼えた。これで俺の高校生活青春偏差値が下がったよ。キナ臭い高校生活が段々確立されていくよ。ああ・・・。

「吼えるなよ、下っ端Aが」

武藤が大河に言い返す。もちろん顔も見ずに。

武藤はサッカー部で、1年ながらレギュラーを任されている。ポジションは・・・どこだっけ。

「今日は玉蹴らなくていいのか？」

俺は聞いてみる。正直あんまりサッカーは知らない。けど、最低で

も普通の友人くらいはもう少し増やしたい。しかもイケメン。俺の周りは堅気には見えない奴等ばかり。

「玉じゃねえよ、ボールだ。ああ、今日は筋トレだ。お前こそ何やってんだ？停学明けたばっかだろ」

「だから、てめえはよお！」

大河がついに武藤に殴りかかった。俺は上半身を大河の進行方向に入れ込んで止める。

「やめろ、大河。今日はもういい。皆に『白菊の実』に集合かけろ」
「・・・うつす」

まだブツブツ言いながら大河はカバンと小さな体を揺らしながら、校門を出て行く。

「不良の長も大変だな」

無表情で喋る武藤は校門を出て、道を曲がっていく大河を目で追いかけるながら俺に言う。

「まあ、俺だつてなりたくてなったんじゃない。普通の生活つてのを今でも取り戻したいと思ってるさ。」

俺はため息を吐きながら答える。そう、なりたくてなったんじゃない。本当なら、普通に勉強して、部活して、恋愛もそこそこして、卒業する。その後の事は後で考える。

でも、もう戻らない。戻れない。このポジションからは引き返せない。巻き込んだ責任、集めた責任が俺にはある。今更逃げれない。

「ふーん、やっぱ入学当初のアレか。あんなに派手にやらかしたら嫌でもそんな状態になるな」

「イケメンでも言ってるいい事、悪い事があるんだぜ？」

「おっと、怒れる獅子が目覚める前に俺はミーティングに行くよ」
おっと、無意識にイラついてたみたいだ。落ち着け、俺。停学明けたばっかだ。これ大事よ。

停学明けてすぐ、また問題起こしたら面倒になるからな。ああヤダヤダ。

イケメンこと、武藤君が振り返った。一体なんだ？

「ああ、言い忘れてた。木下と奥川が付き合ってたぞ。今日の昼休みにな。ご定番の『3番目の桜の木』の下でだ。まあ頑張れ、不良」
奥川さん。クラスで一番可愛い女の子。髪はセミロング、目はクリクリ。色白。おまけに性格は天然。
木下君。誰それ。
「なにーーーー!?」

そうさ、世の中面白くない。
だから言ってる。

ちぎしゅ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3672g/>

ちきしょう

2010年10月21日22時48分発行